

Parlando Interview

本島 阿佐子
(もとじま あさこ) 先生

自分を知るために
音楽を学ぶ

きき手：山本 千春
(演奏・創作学科声楽専修4年)

音楽、歌との出会い

— まず初めに、音楽や歌との出会いについてお聞きしたいです。

本島 母が大の歌好きで、子供の時は母、妹弟とよく家で歌って遊びました。祖父母を招いてファミリー音楽会もしました。ある時、祖父がボツリと「阿佐子は歌が上手だなあ」と呟いたこと、そして小学校の時、先生に合唱部に選ばれたことで「あれ？もしかして私、イケるんじゃないの？」とその気になったことがきっかけです。

くにたちでの学生生活

— くにたちではどのような学生生活を過ごされていたのでしょうか。

本島 音楽の専門知識ほぼなしで、群馬の田舎から東京に出てきたため、カルチャーショックがたくさんありました。オペラも高校生の時にたった1度《蝶々夫人》を見ただけでしたから、周りの同級生たちに比べて本当に遅れている！色々勉強しなきゃ！と焦りましたね。図書館でCDを聴いたり、音楽会やオペラの安い席のチケットを買って観に行ったりしました。寮の先輩にファッション、グルメ、都会での遊び方も教えてもらいました。刺激的でした。

でもレッスンは月曜日だったので、週末にバイトや遊びを入れると練習が間に合わなくなって反省する羽目に。気になって思いつき遊びなかつたなあ。

師事した伊藤京子先生は日本屈指のプリマドンナ。日本のオペラの歴史とともに歩んでいらしたような方です。私が習った頃は日本語の素晴らしい歌曲を広めるために貢献なさっていました。まさに雲の上の存在の尊敬する先生に教えていただき、本当に幸せ者だと思います。先生に失礼のないよう頑張ろう、なんでも吸収しよう、と一生懸命でした。とはいえ、元来練習嫌いなので自分を律するのは苦労しました。

4年間寮生活でした。山本さんも約1年寮生でしたよね？同室の先輩が勤勉で、毎日欠かさず練習するんです。後輩としては「まずい、私も練習しなくちゃ」と重たい腰を上げる。自分も先輩になると後輩の手前、真面目にやらなきゃと思う。そうこうしているうちに少しずつ嫌いな練習が面白くなってきました。やれば結果が出ます

もの。いやあ、田中先輩なくて今の私は語れません。

お掃除当番の早起きだけがずっと苦手だったけど、楽しかったですね。同じ釜の飯を食う関係って姉妹同然になるんですよ。お風呂も一緒だし。この経験で人との距離感、共同生活のルールを学びました。だから他人と住むのは全然平気です。海外生活でも役に立ちました。

留学生活

— 留学されていた時のお話(経緯、現地での出会い、苦労したこと、ハブニングなど)をお聞かせください。

■ Wien ウィーン(オーストリア)ードイツリートー

本島 大学院でドイツ歌曲を専攻したので、絶対にドイツ語圏で学びたい！と熱望しました。

歌詞を理解するためにも実際にドイツ語で話し、暮らしてみても、よく詩に登場する森や野原、風などを実際に体感したいと思いました。大学院2年生の時に受けた友愛ドイツ歌曲コンクールで第1位をいただき、その副賞のウィーンでのコンサートで知り合った方々や先生のご縁で、ウィーンに留学することに決めました。

ウィーンの街は音楽で溢れていました。国立オペラ座とフォルクスオーパー*でオペラ、楽友協会(Musikverein)、コンツェルトハウス(Konzerthaus)では様々なコンサートがほぼ毎日催されています。

小さな街なので、移動に時間がかかりません。人々は仕事が終わると帰宅してシャワー、おしやれをして香水をまとい、音楽を楽しみます。そして、その続きを語りながら夜更けまで食事やワインを楽しむ。映画を見に行く感覚で娯楽としてクラシック音楽が人々の生活に溶け込んでいました。こちらは、都内まで往復所要時間2時間。夜遅いので「音楽会は疲れるもの」でしたから、その優雅な夜に感動しましたね。

オペラの立ち見席は当時約150円、コンサートも毎日たくさん開催されているので、声楽に限らずいろいろなものを聴きました。絵が好きなので美術館も沢山散策しました。知識がなくて分からないことだらけなのですが、細胞が喜んでる感じというのかしら、自分に

響く好きなものが感覚的に分かるようになりました。感性は良い刺激で磨かれると思いますから、みなさんも好奇心を持って色々な体験をしてください。

もう一つウィーンでよかったことは、街の至る所の古い石畳や建物からモーツァルトやブラームス、シューベルトやベートーヴェンの「生きた形跡」を感じられたことです。これにはまさにタイムトラベルの感覚。その当手を想像してワクワク。興奮しました。

—— 私も修学旅行で行き、歴史を肌で感じました。そこでドイツ歌曲と出会い、先生と出会うことができましたと思います。

本島 ご縁がありましたよね。

私、実はくにたちの大学院の時に発声で悩んだんです。悩んで悩んで大学院を修了しました。でも留学先でついた先生が、お医者様みたいで、処方箋のように「これができないんだったらこれをやってみて、これを試してご覧」と具体的な処方をしてくれました。発声の方法もいろいろ教えてもらい、ずいぶん楽になりました。

発声のような感覚的な行為を言葉で伝えることは難しいです。でも、言葉で助けてもらえた。その大切さを身に染み込んでいるので、指導方法を常に模索しています。

ウィーンではドイツ語を学びながら、大学でドイツ歌曲のレパートリーを増やすべく勉強しました。結構忙しかったです。歌曲のクラスでパートナーだったピアニスト(日本人)は今でも親友。彼女は現在、ウィーン音大のコレペティとして教鞭をとっています。

大学の夏休みには色々な講習会も受けました。様々な先生の視点からご指導いただくこと、そしてそこで聴講した仲間の演奏を聴くこと、夜、みんなと語り合ったことなど楽しい思い出です。

その講習会で出会った、バーゼル音楽院のKurt Widmer先生に学ぶこととなります。ここでも縁が繋がりました。

■ Basel バーゼル(スイス) - バッハー

本島 バーゼルの町はドイツとフランスの国境にあり貴金属メッセが有名です。ライン河沿いに12世紀の古い街並みが美しいです。音楽院は古楽科が有名でとてもインターナショナルでした。小さな大学なので学生はみんななんとなく顔見知り、メンザ(学食)で専攻や国籍を超えてわいわい、アットホームな雰囲気でした。

幸運なことに素晴らしいホストファミリーに巡り逢い、大きなお部屋には、スタインウェイのグランドピアノを置いてもらいました。オーストラリアから来た2人の留学生、ヴァイオリニストとピアニストも同居人でした。バーゼルには2年いましたが、その後もこのスイスの家には頻りに帰っています。パパは亡くなりましたが、ママはいま90歳、早くまた会いに行きたいです。

スイス人の文化に対する意識は高いですが、なんと言ってもアルプスの国、自然を愛して暮らすことも大切にしています。自然の中に入ってぼーっとリラックスするんです。何も考えない。ぼんやりする、そんな大切な時間の過ごし方を学びました。

毎日せわしく生きてると心がポツカリしちゃうことがありますよね。心が栄養不足なんですよ。そんな時は木の下にでも座ってみてください。じーっと耳を澄ます。風を感じたり、鳥の声を聞いたり。「心



チロルにて伊藤京子先生と



スイスにて

が自分にある」感覚が戻りますよ。

Widmer先生のレッスンは哲学的でそのアプローチはとてもユニーク。身体の仕組みを考慮した上で、ヨガなどの動きを取り入れ、新聞紙を裂きながら歌ったり、鉛筆で円を書きながら歌ったり、アイデアに満ちていました。友人はみな歌が上手で、一緒に学ぶのが楽しかったですね。

また、当時スイスでは現代曲が盛んでした。音楽院の卒業試験で歌った俳句の曲(ドイツ語対訳)の伴奏がきっかけで知り合ったギタリストの友人(スイス人)は、現代曲のスペシャリスト。彼に誘われて現代曲の演奏の機会をずいぶん得ました。

■ New York ニューヨーク(アメリカ) - 非クラシック・楽しむ音楽 -

本島 12年前に大学の海外派遣研究員として1年間NYCで勉強する機会をいただきました。くににおにジャズ専攻ができた年です。

日本でドイツ歌曲を演奏する際に「言葉の壁」と「クラシック音楽の壁」を感じていたので新たな分野の可能性を探りたかったのと、ウィーン時代に聴いたアメリカ人歌手の音が素晴らしくて、いつかアメリカで学んでみたいと思ったからです。

マンハッタン・スクール・オブ・ミュージックとジュリアードで教えていらっしゃる先生に英語ディクシオンを学びました。あとはアフリカン・アメリカンの先生にゴスペルとポップスの歌い方を習いました。発声からすでにスウィングして楽しかったです。

メトロポリタンオペラ座のシーズンチケットを買い、いつも同じ席で2週間に1度、そしてその合間に学生券でブロードウェイ・ミュージカルもたくさん観ました。当日昼、劇場に行くとその日のチケットが安く買えるのです。冬の寒いシーズンオフでは確か20ドルくらいだったと記憶しています。

ジャズバーも色々探検しました。オープンマイクでは素人のおばさんが上手すぎて驚きました。私はといえば、友だちになったジャズピアニストに、「フィーリングなんだよな、そんなに歌わなくていいよ」と言われて(笑)。いやいや、歌うために今まで人生を賭けてきたのにと失望しましたが、それはそれでいい体験でした。

それから、ダンススタジオの「Absolute Beginner(超初心者)コース」でサルサ、ヒップホップ、ベリーダンス、ポールダンスにも挑戦しました。自分がダンスをするなんて考えられませんでした。先生がこうやってやるとかっこいいよとか、コツを教えるのがうまいんです。楽しかったなあ。そんな経験をして帰ってきたら、ミュージカル・コースに関わるようになったんですよ。

ミュージカル・コースとクロスオーバー

本島 ある朝ニューヨークの地下鉄の中でハタと気付いたのです。車両の人々はみごとに全員がイヤホンをして音楽を楽しんでいる。

でも、この中で一体何人がクラシック音楽を聴いているだろうか。おそらくゼロです。音楽大学にいとごく日常だけど、私たちの生活圏で、クラシック音楽ってかなり特別だわ、と(笑)。

以来、一般聴衆の視点から、クラシック音楽に興味のない方にもこの音楽を純粋に楽しんでもらいたいと、エンターテインメント音楽との融合を真剣に考えるようになりました。

— アメリカから戻られたのは。

本島 2011年、東日本大震災のときでした。新1号館ができた年です。

— ミュージカル・コースができた年は。

本島 ミュージカル・コースが始まって今年で5年目です。今でも、私にできることは何だろう、そして学生が音楽大学でミュージカルを学ぶということの意義をずっと模索しています。

ロンドンで観た《レ・ミゼラブル》のジャン・バルジャンが素晴らしかったんです。それは次の日にロイヤルオペラハウスで聴いた歌手よりも格段に素敵で、あちらの歌手の幅広さ、層の厚さに恐れ入りました。くにおんで学ぶ限りはこういう実力のあるミュージカル俳優を目指して欲しいと願っています。コースは2年間しかありませんからできることは限られています。とにかく基礎力、ミュージカルの前にまず良い歌が歌えるように学ぶのが先決です。声乐レッスン大事です！

声に関していえば、コースに関わるようになってから発声を研究しなしています。私たちの常識では「地声」は声を壊す、とネガティブに捉えられていますが、ミュージカルをやる以上はもうやるしかありません。ミュージカルはお芝居なので、セリフの声で歌う必要があるのです。役によって声の幅や種類も必要です。そのためにもまずは正しく体を使ってお腹から出す「話す声」を探ること。これこそ本当の「自分の声(自声)」ではないでしょうか。これに頭声の響きを加えていく。この響きの量や圧を変えていくことで音色をコントロールできれば理想、と個人的には考えています。

本当の「自分の声」を得て、演技するための声色が変幻自在にできたら、それは歌曲にもオペラにも共通する幅広い表現力に繋がると考えています。

演技をするということは、自分をさらけ出さなければなので、その殻を破るのにみんな苦労しています。でもそれができたら舞台の上で別人になるくらい成長します。みんなが頑張ってる別人になっていく姿を公演などで目の当たりにするので本当に感動します。

私にとっても新しい分野なので、コースでは学生のみんなと一緒に学んで、日々発見なんです。最近では私も積極的に「ジャンル超え」に挑戦しています。この前作ったCD『音泉大国』は、地元群馬の温泉に行き、源泉パワーのインスピレーションで作ったオリジナル曲(作詞しました)と、日本の名曲を入れました。地声も使っています。

アメリカとヨーロッパ

■ カルチャーショック

本島 ヨーロッパでのカルチャーショックは生活の質(クオリティ・オブ・ライフ)が豊かなことでした。人々の心に余裕があります。時間がゆっくりと流れていました。家族や友人との時間を大切に、自然を愛して、文化を愛する。日曜日のお店が閉まり、何もしないで公園で寝そべて本を読む。市場に行けば新鮮で美味しい食べ物が安く手に入る。社会制度が確立しているので老後は安心、お金がなくても美味しく新鮮な物を食べられる。あくせく働かなくてもお金がなくても幸せに暮らせるのです。

逆にアメリカでのカルチャーショックは、「日本と同じだ」ということ。大都会ニューヨークだったからでしょうか、街角ごとにあるスターバックス、ドラッグストア、夜中まで開いているコンビニエンスなグローサリーストア、眠らない街。消費大国アメリカの影響を日本がどれだけ受けているのかよくわかりました。

人々は朝も晩も働いています。忙しいので赤信号は全員無視(笑)。でも、どんなに働いても家賃は高いし、欲しい物は尽きない。医療保険も年金も個人の責任なので、お金がないと生活の保障はないのです。世界で一番豊かな国と思ったアメリカのもう一つの顔をみた気がします。住んでみなければわかりませんね。

どちらにも共通していたのは暮らしに音楽が溢れていたということです。日本はどうでしょうか。考えさせられました。

■ クオリティ・オブ・ライフ(QOL)と音楽の役割

日本が、いえ世界が年々アメリカ化している気がしてなりません。今やヨーロッパでも人々がスマートフォンの画面を常に覗いている風景が当たり前になりました。以前のようにゆったりと風を感じながら時間を過ごすことが少なくなりました。

ミハエル・エンデの『モモ』の「時間泥棒」を知っていますか。自分もなんですが、日々生懸命働けば働くほどもっと忙しくなって、時間泥棒に大切な時間を盗まれている気がしてなりません。忙しすぎて、本当に大切なもの、優しさ、愛、友情、家族、思いやりの心がどこか追いやられてしまっている気がします。いまこそ音楽の出番です。少女モモがみんなに気付かせてくれたように、私たちも大切な役割を担っているのです。そんな思いも込めてミュージカル《いのちの森》はできました。作曲丸山先生、作詞本島、演出安崎先生、振付松永先生で3月公演のものが配信されますからぜひご覧ください。*

私はヨーロッパとアメリカ両方を経験し、日本と比較できて本当にラッキーだったと思っています。西洋音楽の世界では日本人であることは不利、とずっとコンプレックスを持っていましたが、離れてみて日本の素晴らしさに気づき、日本人としての自分に誇りを持つようになりました。ドイツ歌曲も日本人の感性をもっと出して歌ったら、個性的で結構面白いかもな、とも。

悩みについて

— 音楽をなさっていて先生にも悩みはありますか。

本島 もちろんありますよ。いつもみんな何かしら悩みがある。でも、そこが必要なんじゃないかと思うんです。そういう悩みが尽きない音楽をやっている本当によかったとも思います。悩みのまっただ中は苦しいですよ。だけどもある時ひょいっとわかったりする。停滞しているように感じている時でも、その悩みは以前とは違う次元なんです。たまに振り返って前進している自分を認めてあげることが大切なので、悩むことも悪くないかもですね。

だから私は、今でも講習会を受けに行きます。そして一番できない曲を歌うようにしているんです。ものすごい勇氣は必要です。だって音大の先生なのにこんなのも出来ないの、ときっと言われちゃうから。でも、そこをさらけ出したらもう怖いものはない。あとは改善していくだけです。歌以外でもそうです。自分の中でもぞもぞしてい



*2021年度くにおんミュージカル《いのちの森》(2022年3月6日公演)

大学ホームページ「Harmony of くにおん」にて公開予定

https://www.kunitachi.ac.jp/introduction/kunion_cafe/movie/index.html

るものがあつたら表に出して、誰かに話してみる事です。

—— **今でも講習会に行かれる先生だからこそのお話だと思います。**

本島 レッスンなのに、いいところを見せようと恰好つけてもしょうがないですね。本番で一番いいところを出したいからレッスンで教えてもらう、練習も頑張る。でもね、先生の前に立つと、いつもできたところとかができないものじゃない？何歳になってもレッスン受けると思うのよ。「何でできないの？」と言う先生にはならないようにしたいなと思って。学生の気持ちがわかるように、一緒に考えられるように、私も学びつづけなければと思っています。

—— **先生のそうした姿勢、いつも感じます。ありがとうございます。**

学生へのメッセージ

—— **もし学生時代に戻るとしたら、何をしますか？**

本島 ダンス！若い時に始めていたら踊れて楽しかっただろうなと思います。もっと小さいときに戻れたらバレエを習いたいです。学生時代サークル活動してなかったの、今なら合唱団とかも入りたいですね。他校との交流を兼ねて、純粋に音楽を楽しみたい。

—— **「音楽を学ぶ」ということについて、学生に向けてメッセージをお願いします。**

本島 「自分を知る」ために音楽を学ぶのだと信じています。特に声はからだところと直結していますから自分との対峙は必須です。自分に何が向いているのか、何を学ぶべきなのかを知るために学問はあるそうです。ゴールは選択肢がないと決められませんよね。自分のゴールを見つけるために、その選択肢を増やすために勉強するんです。この音(声)がいいとか、そうじゃないとかは知識として知らない判断できない。レッスンなどで良い声を出した体験をしないと、自分であの声が出したい、と望むこともできない。大学の4年間

の学びは、自分の求めるものを見つける、がゴールで良いんだと思います。そしてそれを一生かけて追求するんです。

—— **先生が求めているところとはどんなものなのでしょうか。**

本島 自分らしい声と自分にしかできない表現です。空間一杯に楽々響いた時の気持ち良さはハマります。なかなかできないけど(笑)。その声を常に出せるようにしたいなと思っています。自分らしい声が響いた時、有無を言わず、「よし！」と思うんですよ。何かすばんと抜けたような、「あ、これだ。」「今、絶対響いている。」みたいな。まあ、そこにたどり着くように練習するしかないですね。自分を追い込んで主観的に学ぶこと、客観的に自分を判断する力、この両方のバランスが大切です。

音を心から楽しむ(音楽)ために音を学ぶ(音学)

本島 私たちは心に響く音を奏でるために勉強し、「音」を通して自分という人間の「心」を育てます。感性を磨き、本物の音が聞き分けられる「耳」を養いましょう。そのために技術や表現の方法を知識として学び、試行錯誤しながら体得します。

音楽を学ぶことの目的は、良い演奏をすることだけではなく、より良い自分をつくることだと思います。学びの過程で得る沢山の気づきは音楽以外にも必ず役立つはず。なんとと言っても300年以上かけて受け継がれてきた音楽。その本物のエッセンスに触れられる私たちはすごくラッキーなんです。その本物の波動が心に振動するので。からだところを開いて、整うように修練しましょう。その波動はみなさんを通じて聴衆にも伝わると信じています。

そしたらきっと日本も音楽を愛する人でいっぱいになるはず。です。

—— **ありがとうございました。(了)**

プロフィール 本島 阿佐子(もとじま あさこ)

国立音楽大学、同大学院、ウィーン国立音楽芸術大学、パーゼル音楽院修了。さらに国立音楽大学長期国外研究員としてニューヨークにて研鑽を積む。国際バッハ・コンクール第1位ほか、国内外で受賞。ドイツ歌曲から現代曲まで幅広いレパートリーで演奏活動を行う。伝統と現代音楽の融合「いのり」、ドイツ歌曲「リーダー」、山下洋輔ジャズピアノとのコラボ童謡「メロディーズ・オブ・メモリーズ」、武満徹ポップス「うたうだけ」、地方創生を目指した「音泉大国」のCDをリリース。国立音楽大学教授。

<https://asakomotojima.com/>

本島阿佐子先生おすすめの資料

『**アミ：小さな宇宙人**』エンリケ・バリオス著；石原彰二訳；さくらももこ絵 徳間書店 2005 (徳間文庫)

『**愛に生きる：才能は生まれつきではない**』鈴木鎮一著 講談社 1966 (講談社現代新書) 請求番号●C33-236 ほか

『**生きるための26のこと**』七田眞著；七田厚監修 アイバ出版 2014

『**心の教育**』井深大著 アントレックス 2015 (サブライズ book)

本島阿佐子先生の著作関連

<CD>

『**音泉大国～温泉大国・群馬をめぐるサウンド・トリップ**』

Fontaine Record 2022 請求番号●XD78196

『**うたうだけ：武満徹ソング集**』

Asako Motojima 2020 請求番号●XD77537

『**Melodies of memories**』

Greenfin Records 2017 請求番号●XD74027

『**Lieder**』

Mozart & Schubert. Greenfin Records 2014 請求番号●XD78195

『**いのり：prayers of a Japanese spirit**』

Greenfin Records 2010 請求番号●XD64542

『**Les délices de la Suisse : Gitarrenlieder aus der Schweiz**』

Musiques Suisses [2007] 請求番号●XD78217

『**Marimba virtuoso**』 Philips 2002 請求番号●XD48301

『**Mozart opera gala concert**』

国立音楽大学 [2002?] 請求番号●XD48818

『**Klavierbüchlein für Anna Magdalena Bach II : 1725**』

マイスター・ミュージック 2000 請求番号●XD44813

<図書>

『**音楽大学におけるFD『草の根FDプロジェクト2019』：教師の指導への気づきを高める**』中西千春、本島阿佐子編著 飛鳥井出版 2020 請求番号●J136-824 ほか

『**音楽大学のグループレッスンにおける思考力育成の取り組み**』

中西千春編著；本島阿佐子、堀江志磨、進藤郁子編集委員

飛鳥井出版 2016 請求番号●J131-327 ほか

やまもと ちはる ● 先生のユニークなご指導の背景には、これまでのご経験が深く関わっていたのだなと思いました。困難な状況でも、前を向いて、音楽をしたいと思います。